

重点目標	日本語力、学力の向上を目指し、質の高い教育活動を推進する。	P
現 状	<ol style="list-style-type: none"> 1 幼稚部を修了した時点で地域の小学校を選択する傾向が強く、小学部への入学者は減少傾向にある。中学部・高等部については、県内各地の小学校や中学校を卒業し入学してくる生徒がいるが、その理由や教育的ニーズは様々である。 2 高等部に入学してくる生徒の中には、大学進学を希望する者もあり、概ね進学の希望はかなえられている。また、高等部卒業後、さらに2年間専攻科で学び、就職を目指す生徒もいる。一方、就職に関しては、県内外とも厳しい状況が続いているが、就労を希望する者のほぼ100%を就労に結びつけることができている。 	
具体的な目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 小学部・中学部の教科指導において、学年対応率90%以上を目指す。 2 大学進学を希望する高等部生の進学率90%以上を目指す。 	
目標達成のための方策	<ol style="list-style-type: none"> 1 自立活動の専門性と教科指導力を向上させ、主体的な学びを引き出す授業づくりを行う。 2 小・中・高等学校や他県聾学校との授業研究交流を通して、授業力の向上を図る。 3 各教科における指導内容を適切に精選し、学部全体を見据えた年間指導計画を作成する。 	
具体的な取組状況	<ol style="list-style-type: none"> 1 全日本聾教育研究大会に向けた全校授業研究会を実施し、大会の指導助言者から指導助言をいただいた。また、東北地区の聾学校にや県内の小・中学校に呼びかけ、多数参加していただいた。情報交換を通して、教科指導や自立活動の専門性の向上を図った。 2 授業研究会と関連させて授業の配慮点について話し合う全校自立活動学習会を実施した。初めての試みで試行錯誤しながらの実施だったが、授業における自活的配慮について具体的に良かった点、改善すべき点を確認することができ、次の授業に生かすことができた。 	

達成状況	<p>1 小・中学部の主要教科において、当該学年の教科書を使って授業を行っている児童生徒は85%であり、前年度並みであった。（知的障害を併せ持つ者を除く）。</p> <p>2 今年度の高等部卒業生のうち進学希望者はいなかったが、就労希望のある生徒は、希望をかなえた。</p>	
------	---	--



自己評価	<p>(評価) B</p>	<p>(根拠)</p> <p>1 「具体的な目標」に掲げた「教科指導の学年対応率90%以上」には、今年度もわずかに及ばなかった。</p> <p>2 言語聴覚士の資格を有する教員を活用し、言語検査や各種検査を通して、言語力や発達面を評価し、指導計画や実践に反映させるケースが増えてきた。</p> <p>3 教職員の学校評価では、「指導力の向上、主体的な学びを引き出す授業づくり」の評価が最も高かった。</p>	C
------	-------------------	---	---

- ↑ 評価基準
- A : 具体的な活動がなされ目標を達成できた
- B : 具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
- ↓ C : 具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない



学校関係者 評価と意見	<p>(評価) B</p>	<p>(意見)</p> <p>「児童生徒への動機付けを大切にして、探求型の授業を全国に発信してほしい。」という意見が出された。</p>	C
----------------	-------------------	---	---



自己評価及び 学校関係者評価に基づいた 改善策	<p>1 指導力の向上を図り、引き続き「分かる授業」づくりに努める。</p> <p>(1) 教科等の指導力の向上</p> <p>(2) 自立活動的配慮の徹底</p> <p>(3) 手話、ICT機器、ホワイトボードなどの視覚的手段の活用</p> <p>2 全日本聾教育研究大会秋田大会を通して、教科指導力の向上と自立活動的配慮の徹底に努める。</p> <p>3 言語聴覚士の資格を有する教員を活用し、検査結果を分析して指導方針や方法を明確にし、言語指導や自立活動的配慮を充実させる。</p>	A
-------------------------------	--	---